

政務調査報告書

上ノ国町議会議員 岩田 靖

1. 政務活動名

「長野県宮田村における子育て政策と移住政策と人口減に対する村の政策について」

活動日 令和7年3月26日～28日

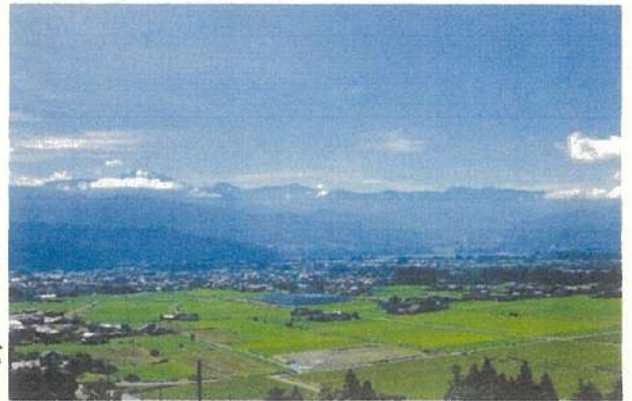
視察先 長野県上伊那郡宮田村

担当課 みらい創造課 課長 保科靖国 企画係長 池上敦規

同行議員 中澤嘉彦議員、小間均議員

2. 宮田村とは

信州長野の南部に位置する宮田村（みやだむら）は、東に南アルプス、西には中央アルプスの壮大な景色に囲まれた人口8,760人の小さな村である。また、とにかく水が綺麗で、中央アルプスの木曾山脈の雪解け水が流れる川や、井戸水がいたる所にある。約3,000m級の中にある木曾駒ヶ岳には、ロープウェイ2,600mまで上ることができ、360度パノラマの美しい景色が楽しめる。殆どが中央アルプスの高い山だが生活圏は半径2kmに凝縮されており、その中に教育施設・医療機関・飲食店・スーパーが集結しており、また、近隣町に大きな市があり、高校・大きな病院・量販店・宿泊施設が充実している。宮田村の中央を通るJRや、山の麓を走る高速道路（中央道）もあり、流通に便利な場所でもある。

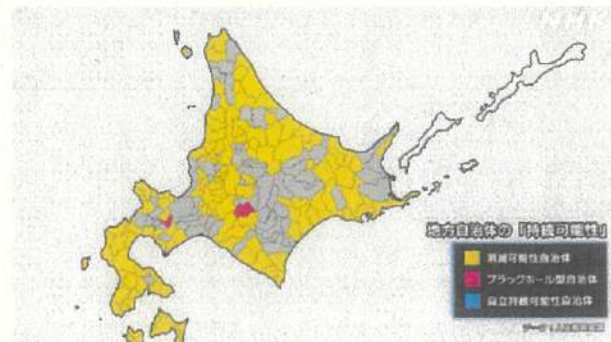


3. 宮田村を選んだ理由

現在、何処の市町村でも少子化が進み人口減が激しく、最終的には744の自治体が消滅する可能性があると言われている。北海道の場合179市町村の内、半数以上の117がそれに当たる。北海道の自治体の大半は人口の流出が激しく、転入した人の数から、転出した人の数を引いた「社会減」と、出生者数から死亡者数を引いた「自然減」について両方の対策が必要な自治体が少なくないとしている。

上ノ国町においても、こうした問題に対して様々な政策や支援が重要と考える。その中で、移住に関して、子育て支援に関して先進的に行っている宮田村に興味を抱いた。上ノ国の人口の規模からして、本州ではそれが村にあたる。

様々な雑誌やネット上で「人気の移住先ランキング」や「住みたい町ランキング」という



ものがあるが、宝島社から発行されている「田舎暮らしの本住みたい田舎ベストランキング」＜このランキングは、移住支援策や子育て、医療、自然環境、就労支援、移住者数などをはじめとした調査を基に、田舎暮らしの魅力を数値化してランク付けをするもの＞ 人口 5,000 人以上 1 万人未満 総合部門第 2 位、子育て世代部門第 2 位、若者世代・単身者部門第 3 位、（2025 年版）何年もの間常に上位に入っているのが宮田村だった。どの様な魅力があり、どの様な政策がとられているのかを調査するのが今回の目的である。



3. 宮田村みらい創造課の研修内容

令和 7 年 3 月 27 日宮田村役場会議室において、研修会が行われた。最初に宮田村議会議長の川手三平氏による挨拶があった。川平議長は、上ノ国のことをあらかじめ知ってもらっていて、上ノ国の面積は約 547.7km²であり、宮田村は面積が 54.5km²で丁度 10 分の一であること。人口は 9 千人弱である事。宮田村のみらい創造課の人達が、移住・子育てに対してだいぶ頑張っている。宮田村は山国ですが、雪はあまり降らない。また、下水道事業が全国で 1 番、2 番に整備している所でもある。当初より 99%整備している。最近古くなった箇所は、だんだんと直して行っている状態。住む人にとっては便利だと思う。また、村がコンパクトなので全体的に見渡せる。さらに交通の便利さなどの村の紹介や遠くから来たことのねぎらいの言葉をいただいた。



その後にみらい創造課の保科課長、池上企画係長による研修会が行われた。あらかじめ作ってもらった資料を基に、宮田村の紹介、主に移住対策と子育て支援、その他について、スクリーンを見ながらの説明である。内容は以下のとおり。一通りの説明が終わった後、こちらから宮田村と上ノ国町の比較をしながら、上ノ国町の現状の説明、「宮田方式」や農業のやり方のこと、サーモン養殖のこと、防災や消防団のこと、議会のこと、福祉支援のことなどを質問し、答えてもらった。この後、休憩を挟んで保科課長の運転による、村内の施設見学などをさせてもらった。



4. 宮田村が行っている政策

Ⅰ、「宮田方式」による荒廃農地ゼロに向けた取り組み（遊休農地 3ha 以下）

昭和 56 年、農地の荒廃を防ぎ、農地を守るため「土地は自分のものだが、土はみんなで活かして使う」（農地の所有と利用の分離）と言う理念のもと、村内の全農家（農地所有者）が参画し『一村一農場』を目指す独自の農業システムが「宮田方式」である。宮田方式は、農地利用委員会と、機械化一貫体系による稲作を担う集団耕作組合の二つの組織、そして農家、村、農協が一体となって、地域農業の振興や支援を行うシステム全体の総称。独自の農地流動化推進のための地代制度や、米の適地適作団地化によるプール精算などが柱となっている。同委員会ではまず、転作を含めた村全体の土地利用計画を作り、地質調査などを参考に地帯別用途区分を決めた。農地の所有者がその農地の使い方を決めるのではなく、農家の話し合いによって作物団地化や担い手への土地集積など、村全体の農地を有効活用する計画を立てた。これをもとに、農地の貸し借りをし、この時、委員会は両者の間に入って契約を結び、利用権の設定を行った。共助による独自の地代制度にも村の全農家が参画。水田所有者全員が 1a 当たり五千五百円を共助金として拠出。委員会ではこれに国からの転作奨励金などの資金をプールし基金を造成し、農地の提供者には地代を上乗せ、受託者には地代を補助することで、両者を支援している。一方で、圃場整備を早い段階で完了させ、多くが兼業で経営規模の小さな農家が主体を占める宮田村では、村内七集落ごとの集団耕作組合が農機の共同利用と農作業受託を行ない、機械化一貫体系による稲作の効率化を進めてきた。また、共同利用による農機の稼働率を上げることで生産に係る農機のコスト削減にも結びつき、低コスト稲作を実現した。そして労働力確保の問題や機械の高性能化により、次第に専属オペレーターによる作業受託が行われるようになり、現在では農家での主な作業は集団耕作組合に委託され、畦畔管理などの管理作業が農家の仕事の中心となってきた。また、標高差など地域特性によって適した品種の地帯別作付けと生産指導を行ない、宮田村では標高七百mを境にそれ以上の地帯ではモチ米、それ以下の地帯ではコシヒカリの作付けがされている。このことにより、品種による価格差が農業所得の差とならないよう、平成元年から村内全体で米のプール精算が始まった。また、計画的な作付けは集団耕作組合の連携により、標高の低いところから高い方へと順次刈り取りが行なわれ、作業の効率化も進んだ。この方式は平成五年以降、宮田村を含む上伊那南部四市町村（旧 JA 伊南管内）に広がりを見せていった。

つまり法人化して、村で土地をいったん買い上げ、そこから貸し出す。また、村で管理することによって、景観が保たれる。村で行うことは主に水の管理と雑草狩りである。（自動）村の中では、夏場であっても雑草の生えている場所はない。

主に村で農家をやっている人達は、全国的な米の消費量の減少とそのことに起因する、国の減反政策もあって、米を作ることができない水田が約 4 割も、そこで、村全体で担い手への農地の流動化を進め、大豆、そば、大麦のほか、りんごを主体とする果樹や花き、多様な野菜などが栽培されている。農家は、2 種兼業の稲作農家が多く、専業農家は



宮田果樹園

カーネーションや鉢花などの施設園芸、アスパラガス・すいか・トマトなどの野菜、りんごが主だった経営だ。木が低くて大量に実がなる種この宮田方式だと、移住者が何の知識もなく果樹園をやりたいとしたら、空いている場合そこを直ぐに継承してできる仕組みであるところが素晴らしい。

Ⅱ、移住・子育て応援事業・子育て関連支援制度

<子育て応援事業> (子育て支援係)

○誕生祝金事業

出産した新生児の父母で、出産の日以降引き続き宮田村に移住する医師を有するものに対し交付する。

【誕生祝い金の額】

- 第1子 6万円
- 第2子 8万円
- 第3子 13万円
- 第4子 20万円
- 第5子 50万円

○保育料助成事業 (給食費も無償化)

【事業の対象者】

第2子以降の子ども(3歳未満児を除く。以下同じ)が、保育所又は幼稚園に入所した児童の保護者に交付する。

【助成金の額】

第2子以降の保育料(減免の額)のうち、当該子の産出額の10割

○輝く子育て応援事業

【事業の概要】

宮田村に新たに住宅を取得(新築、中古住宅の取得)し、子育てを行う世帯を応援するため取得した住宅及び土地に係る固定資産相当額の輝く子育て応援金5年間交付する。

【事業の対象者】

宮田村内に新たに居住するための住居を取得し、取得した住居に居住することとなった日から引き続き10年以上宮田村に居住する意志を有する者であって、申請者及びその配偶者の年齢の合計が80歳以下の者又は居住開始日に中学生以下の児童と同居する保護者とする。

【助成金の額】

取得した住宅及び土地に係る固定資産税の額

○小・中・高校 入学祝い金

(小学1万円、中学3万円、高校5万円)

○フレフレ18きっぷ事業

宮田村に住み県内の高校に通う3年生(最終学年20歳未満)の家族に35,000円補助

○子育てファミリー転入奨励金

村外から家と土地を購入して転入し、居住開始日に中学生以下の子どもを教育している世帯に対して100万円を交付する。

○保育園でALTによる英会話教室実施

ALTとは、外国語を母国語とする外国人指導助手のことを言う。主に小中高等学校の日本人教師の補佐を行い、子どもたちに「生の英語」を学ばせることが目的で派遣される。

○奨学金返還補助 奨学金を活用し、地元へ就職したもののに対して最大で5年間で100万円を補助(返還額の2/3)(要件あり)

○小・中学校 通学用かばんプレゼント

○小・中学校 給食費補助 一人あたり年間1万5千円

○中学校海外派遣授業

○高校卒業まで医療費無料

○学校給食地元産食材65%以上使用

<子育て支援関連事業> (みらい創造課)

○空き家改修等補助制度

空家バンクの物件のリフォームに最大60万円(工事費の2/1)、空家の木値に最大100万円(工事費の2/1)、]ゴミ等不要物の撤去費用最大40万円の補助する。(要件あり)

○宮田村住宅開発促進事業補助金

村内に200平方メートル以上の分譲区画が4区画以上の宅地開発をする事業者、1区画あたり40~60万円を補助する(要件あり)

○子育て世帯誘致報奨金制度

宮田村に土地を購入しいえをたてようとしている村外の子育て世帯の情報提供者に、奨励金として20万円を交付する。(事業者、個人を問わず)

○移住者住宅支援授業補助金(家賃補助制度)

県外から U ターンや I たーんを希望する方、結婚を機に損害から宮田村に住む方などへ、民間の賃貸住宅に住む際の家賃を最大で 1 万円／月を最大で 3 年間（36 月分）補助する

○ UIJ ターン就職・創業移住支援事業

東京圏・おおさか・愛知県より移住し、県内で一定の就業または創業をする方に対し、移住支援金を支給。単身：最大 60 万円、2 人以上世帯：最大 100 万円プラス 18 歳未満の世帯員 1 人につき最大 100 万円加算（要件あり）

○ふるさと就職応援金

宮田村出身者で地元に住み就職した場合に 5 万円のお祝い金を支給

5. 移住定住支援政策を行うに至った経緯

平成 26 年度 まち・ひと・しごと創世総合戦略が閣議決定され、平成 27 年度中に地方自治体において、中長期を見通した「人口ビジョン」と、5 ヶ年「地方版総合戦略」を策定することとなった。

宮田村の人口推移

H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
9,296	9,275	9,177	9,143	9,186	9,084	9,083	9,015	8,955	8,900	8,863

平成 22 年まで続いてきた人口増が→維持→減少傾向に

「住みたい・住んで良かった・住み続けたい宮田村」実現

人口減少社会に対応するため人口増施策を優先課題として取り組む

6. 宮田村の移住施策への取り組み

○定住促進専用ホームページや SNS による情報発信

The screenshot displays the Miyata Village website with several sections:

- 子育て支援 (Child Support):** Includes a link to "詳しく知る" (Learn More).
- 移住体験 宿泊施設 (Relocation Experience Accommodation):** Features a link to "詳しく知る" (Learn More).
- 移住者の声 (Voices of Relocators):** Includes a link to "詳しく知る" (Learn More).
- 仕事 (Work):** Includes a link to "詳しく知る" (Learn More).
- 支援制度 (Support System):** Includes a link to "詳しく知る" (Learn More).
- 宮田村 Youtube チャンネル (Miyata Village Youtube Channel):** Features a "CLICK HERE" button with a hand icon.

○各種セミナー・フェアなどの実績

- ・令和6年度移住セミナーとの実績
- ・楽園信州関係
- ・おいでや田舎暮らしフェア（大阪）
- ・信州で暮らす働くフェア
- ・ふるさと回帰フェア
- ・JOIN 移住交流地域おこしフェア
- ・上伊那広域連合主催移住相談会2回（東京・大阪）
- ・無印良品店舗での「宮田市」 他
移住相談ワンストップ窓口の実現



- ・上伊那若者人材確保協議会（上伊那広域連合）への参加
- ・上伊那わかもの会議、ふるさと郷育、就活前準備合宿、
- ・企業見学ツアー、首都圏での企業セミナー等
- ・通年事業として官民一体となって実施
＜村独自事業＞
- ・リターン就活バス事業
- ・学生・保護者向け就職セミナーの開催



○移住への取り組み・相談件数

	セミナー回数	セミナー相談会相談回数	窓口・電話等件数	合計（延べ数）
平成27年度	5回	23件	23件	46件
28年度	8回	48件	57件	105件
29年度	10回	52件	70件	122件
30年度	9回	136件	86件	222件
令和元年度	9回	115件	93件	208件
令和2年度	8回	136件	86件	225件
令和3年度	11回	230件	224件	454件
令和4年度	9回	88件	222件	310件
令和5年度	11回	105件	321件	426件

○宮田村移住者の推移

	20代	30代	40代	50代	60代以上	合計世帯数	合計人数
平成27年度	4	4	2		1	11	16
28年度	10	1	3		1	15	36
29年度	11	9	4	1	1	26	63
30年度	12	2	4	5	1	24	56
令和元年度	6	5	2	1	1	15	44
2年度	4	9	6	2	2	23	60
3年度	4	11	6	5	2	28	62
4年度	7	7	6	5		28	62
5年度	11	7	6	2		26	73

7. 宮田村の施設

○移住体験住宅「ベース☆みやだ」の運用

空き家を村が購入し簡単にリフォーム

1泊2日から30泊まで利用可能。

利用期間中に希望に応じて村の案内、仕事の紹介
空家の紹介等を行う

移住商談はすべて相談者の要望に応じて対応

	利用件数	利用日数	稼働率	移住者数
平成28年	31	202	53,34%	2組
平成29年	59	252	69,94%	5組
平成30年	50	257	70,41%	7組
令和元年	44	314	86,03%	4組
令和2年	43	223	61,10%	3組
令和3年	28	176	48,20%	2組
令和4年	30	274	75,00%	4組
令和5年	48	319	87,49%	7組

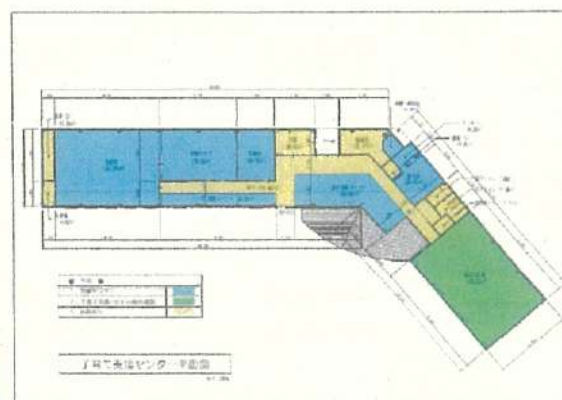


○宮田村子育て支援センターうめっこらんど

うめっこらんどは0歳から18歳までの子どもと保護者
であれば誰でも利用することができる施設。

(学童保育は有料、申し込みが必要になる。)

うめっこらんどは同年齢異年齢の子ども、親が共に集い、
育ち育てあう場所。



○介護・商業の複合施設 わが家 オヒサマの森
介護を基盤とし、障がい者支援や託児、飲食店経営など、新しい介護業界の形をご提案する企業。2013年5月3日、宮田村河原町商店街の中心に、介護・商業の複合施設

【オヒサマの森】がOPENした。介護施設、有料老人ホームわが家直営の飲食店2店舗、雑貨店などの外部テナント4店舗が同じ建物に入っている。

3/15（土）、石破茂内閣総理大臣が宮田村の介護・商業の複合施設（わが家 オヒサマの森）を訪問した。

石破総理は、同じ空間に子どもから高齢者まで幅広い世代が過ごしていることを踏まえ、「ポイントはコミュニティ。いろいろな世代が集まるのは新しい形だ」と語った

その人のもつ特性を理解し、老若男女関係なく集まれる場所の重要性と必要性を話しました。石破総理はオヒサマの森の視察を含めて会見のなかで、オヒサマの森のように、小さな規模で地域のいろいろな世代の人たちが集まるというのは新しい形。今日の例も参考に、改めてCCRC（Continuing Care Retirement Community）を中心とした取り組みについて検討チームを作って強化していきたい、と話していただいた。



8. 宮田村にある企業・工場

宮田村には企業が240社以上ある。その内上場企業が2社ある。企業に勤める従業員の数は10～80名が多い。また中には500名の従業員を有する企業もある。

宮田村にある企業は、精密な機械や部品を作っているところも多く、また、世界に一つだけのレコード会社などもある。働ける所があるということは、移住者にとってはたいへん重要である。

○日本発条株式会社

資本金／170億957万円 創業／昭和14年9月

取引先／国内全自動車メーカー、国内主要電機メーカー

伊那工場従業員／492名 宮田工場従業員／98名

世界No.1のばねメーカーであるとともに、現在は業容を拡大し、国内24社、海外35社のグループ会社を有し、自動車、情報通信、産業・生活の幅広い分野に「なくてはならないキーパーツ」を提供している。



○株式会社マスタ

資本金／1,500万円 創業／昭和37年2月 従業員／217名

主要取引先／オリンパス㈱、長野オリンパス㈱、

会津オリンパス㈱、日本特殊陶業㈱、㈱コガネイ 他



医療機器(内視鏡医療用処置具)、光学機器(顕微鏡)の部品加工、光学機器の組立、医療系小径パイプ曲げ・ろう付け、精密板金加工、大豆食品の製造販売

○宮田とうふ工房(株式会社マスダが経営)

宮田とうふ工房では、信州産大豆「ナカセンナリ」と中央アルプスの伏流水を使って、大豆本来の味を大切にした「本物のとうふづくり」に取り組んでいる。

2019年に国道153号線沿いにオープンした直営店では、長野県豆腐品評会で「県知事賞」を受賞したとうふはもちろん、新鮮な豆乳やおからを使った、お惣菜や、どーなつ・ソフトクリーム等のスイーツも豊富に取り扱っている。直営店で一番人気は「とうふどーなつ」店内でひとつひとつ丁寧に手揚げしているため、もっちりふわふわのクセになる食感。5種類のレギュラーどーなつと10種類以上の「週替わりどーなつ」をお楽しみいただける。濃厚な豆乳を使った豆腐。国の減反政策で、畑で「ナカセンナリ」を作ってもらい全て買い取っているが、それでも原料の大豆は足りない。会社の横には豆腐工場も併設している。



宮田豆腐店と道路向が
株式会社マスダ



種類が豊富なこだわりメニュー

○本坊酒造(株) マルス駒ヶ岳蒸留所

中央アルプス駒ヶ岳の麓にあり、その伏流水を利用したウイスキー製造。岩井喜一郎氏設計の蒸留窯をはじめ、ジャパニーズウイスキー創生までさかのぼる歴史的系譜で繋がる蒸留所ウイスキーの芳醇な香りにつつまれる中、原料の粉碎から仕込み、発酵、蒸留、貯蔵熟成といった各製造工程を間近で見学することが出来る。そこでは「シングルモルト駒ヶ岳」と「岩井トラディション」が作られている。この殆どが「宮田村ふるさと返礼品」として出荷。また、宮田村で作られている「ヤマソービニオン100%」の「みやだワイン紫輝」も製造されている。



9. 移住者の声(宿泊先の宿屋 DOYA 経営者にインタビュー)

○宿屋 DOYA 経営とリンゴ・ブドウ果樹園経営の今堀千恵子さん
今回宿泊した宿の女将さんに話を伺いました。

宮田村は、前町長による移住者を増やす政策で近隣町からも移住者が多いと聞いてます。私は農業をやっていますが新機農業がしやすい町だと思います。農地は役場が管理しているので、



経営者の今堀さん

役場から借りることができる。相談にも乗ってくれるので、やりやすかった。元々私は大阪出身で、大阪の会場で「移住者フェア」をやっている、隣町の駒ヶ根市を見に行ったら、大阪に住んでいる頃は、伊那市と駒ヶ根市は知っていたが、宮田村のことは知らなかった。たまたま宮田村でやっている「空家バンクツアーに参加しませんか」と言うのを知って、駒ヶ根は市だから移住するのにお金がかかると思い、村なら安いと思い参加した。そこで役場の人に「農業をやりたい」と言ったら、「新規の政策があるから大丈夫です。」と言われた。仕事はちょうど地域おこし協力隊が空いてるということで、住む所は協力隊に家が付いてくるということで即決した。フリーミッション型で、どういう風に宮田村に住むかを考えた。協力隊在籍中にブドウ農家を借りて、栽培した。元々あった畑ではないので、収穫までに3~4年かかるということで、空家バンクで店舗付の住宅を紹介してもらった。店舗は元々やっていたピザ屋を開業。農家で飯が食えるようになったので、飲食は辞めた。店舗はゲストハウスにイノベーションして、宿泊業と果樹で生活している。果樹園の人手は障害者の人に来てもらって経営している。宿は、駒ヶ岳が宮田村にあるので、登山の人が主な客である。駅が近いのと、高速が通っている（高速バスも）アクセスがいいので客もある。（シーズンは6月山開き~11月15日閉山まで）宮田村を選んだ理由は、高い山があって景色が良い。長野には温泉が沢山ある。1時間程度で遊びに行ける「高山」高速で行く「名古屋」1日かけて遊ぶなら、250km圏内で「東京」「大阪」「横浜」にも行ける。

宮田村に来てみて、生活が安い。商売人との付き合いがある。水が美味しい。田舎のほっとする生活感がいい。役場の人の存在が近い。役場の雰囲気明るくて相談しやすい。

○東京からの鈴木さん（HPより）

仕事でフルリモートになり、商業施設と自然のバランスが良いので宮田村に移住。家族と過ごす時間が増え充実している。地方創生や人材紹介・採用支援事業に従事してきた経験のなかで、どういった方が移住担当をされているのかは大事だなと思っています。村の担当者である保科靖国さんと実際にお話しをさせていただいた時、地域の人と仲が良くて繋がりを広く持たれている方であると分かって安心感が違いました。5年、10年後になった時に後悔しないように考えた上で今の自分に合っているなと感じる。

10. 宮田村のその他の取り組み（主に研修時の質問と資料による）

○宮田村の議会

宮田村の議会は、毎年3月・6月・9月・12月に開かれる「定例会」と、随時開かれる「臨時会」がある。定例会は休会を挟んで2週間行われる。議員の定数は12名で、そのうち2名が女性。3月は「予算議会」、9月は「決算議会」



宿泊先の宿屋 DOYA



宿屋 DOYA のフリースペース



と呼ばれている。また、「議会運営委員会」「常任委員会」は「予算委員会」「決算委員会」「特別委員会」がある。また、行政機関から説明を受ける「全員協議会」が随時開催される。また「広報広聴会議」は全議員で議会だよりの発行、各種団体との意見交換を行っている。災害時には全議員が「危機管理連絡会」を設置することもある。議会機能強化のため「特別委員会」が5名いる。40を超える審議会に全議員を割り当てしている。本会議については、ケーブルテレビ、YouTubeで録画配信。おおむね5人以上の各種組織やグループから要望があれば、「議会懇親会」を開催、議会だよりやHPで公表。持続可能な村づくりのため、議会・行政・住民三者対等の策定委員会で議論を重ねている。「宮田村住民参加の推進に関する条例」で「村人会議」を設置、その中で中学3年生に「議会講演会」。危機管理条例に基づき「オンライン会議」でタブレットを導入、完全な「ペーパーレス会議」に移行。

○駒ヶ岳いぶきサーモン

宮田村にある「いぶき養鱈場」は中央アルプスを源流とする黒川の冷涼な清流で、サーモンやイワナ、コイなどが養殖されているその中でも。ふるさと納税の返礼品にも選ばれている「いぶきサーモン」は冷たい水で育てられるため出荷に8年間かかる。そのために身が引き締まったサーモンのお刺身、小粒でプリッと弾けるような食感のサーモンのイクラは、絶品。また、種苗出荷も行われ、4年間育てられたものが瀬戸内海に行き、「讃岐サーモン」として売られる。隣接する宿泊施設「息吹館」で、味わうことができる。種類はドナルドソンである。



○宮田村の消防団と自主防災組織

宮田村の消防団は3分団で、11の部数（11の自治会）に分かれている。団員数は250名ほど在籍し、そのうち女性が13名いる。また、その内役場職員が25名いる。火災時と風水害等の災害時の出動報酬が8,000円と上ノ国より高い。村には普通ポンプ車が2台、小型動力ポンプ付積載車が10台。火災時には近隣町の消防車が、要請が無くても駆けつける。普段の訓練は、役場職員と共に訓練や操法を一生懸命頑張り、大会などで競い合っている。消防団の活動は40歳くらいまで行い、その後消防団OBは、地域の「自主防災組織」の指導者に据えるなどして強化している。全地域に自主防災組織と防災倉庫を兼ね備えていて、災害時（主に地震、標高が高いため水害は無い）に備えている。令和6年1月1日、



自治会の防災活動

村と提携を結んでいる穴水町が災害に遭ったときに、防災倉庫より直ぐに防災用品、特に折りたたみベッドなどを送った。この先消防団の減少を見据えて、消防団 OB による「第 2 消防団」の結成も考えている。

○伊那市（隣の市）

3 月 15 日に石破首相と地方創生大臣が伊那市を訪問。市が実証実験を進める山小屋への物資輸送用の無人航空機の展示を見学、た、市内で遠隔医療モバイルクリニックや寝泊まりしながら仕事ができるモバイルオフィスなどの車両

「モバイルクリニック」として運用されているオンライン診療用の車両なども視察した。その後、石破首相は、

産学官の連携拠点施設「INADANI SEES」で開催された政府の地方創生関連の有識者会議に出席した。地方の人口減少が特に女性で顕著となる中、石破首相は「女性がとどまってくれる地方はどういうものか」と尋ね、長野県の阿部知事は、「男女の固定的役割、分担意識が大都市よりも強い。

女性が楽しめる、居心地がいい空間を、もっと作っていくことが重要だ」などと説明した。

Inatadani Sees（農と森のインキュベーション）は、2 階に 7 つの会議所・1 階にはフリースペース。不定期に行われる出会いの場「焚き火を囲む会」やフリースペースで行われるイベント。オフィスとして活用できる空間「ラボ」の貸し出しなど。持続可能な社会を目指そうという新感覚施設。また施設は地元の木を使い、冷暖房はペレットを使っている林活的な施設。



11. 宮田村政務研修の感想

宮田村の移住政策には、様々な要因が折り重なって成功していると感じた。風光明媚な景色もさることながら、中央アルプスがもたらす豊富で美味しい水。バスとロープウェイを使って軽登山・本格的登山が楽しめる木曽駒ヶ岳。また美しい千畳敷カール。そのアルプスの麓で行っている「アサギマダラ」や「ライチョウ」の保護活動。綺麗な水と交通の便、村の様々な受け入れ体制で入ってくる小・中企業・大企業。2km に集約された便利な村。昔から行っている公園整備などで育つ有名なオリンピック選手やプロスポーツ選手（フィギュアスケート小平奈緒・新谷志保美選手、埼玉西部ライオンズ水上由伸選手、松本山雅 FC 田中想来選手、AC 長野バイセロレディース稲村雪乃選手）など、農業で全国から視察が来る「宮田方式」、妊娠してから生まれて、学校に行って、町に出て、UIJ ターンで帰ってきて、村に住むまで、さらに村で生活できる環境、どの世代にも優しい支援事業。また、村だけで完結しようとはしていなく、例えば村に高校はなく、近い近隣の市に頼っている。それは高校だけではなく、量販店・宿泊施設・大きな病院なども同じである。村を拠点にした交通の便も良く、村の中央を通る JR、山の麓の高速道路（IC は隣の駒ヶ根市）、1 日 20 本出ている東京までの高速バス。250km 県内の都市大阪・名古屋・東京・横浜など。

また、移住したい人が困るのが住む所である。宮田村は体験住宅はあるが、1件だけである。アパートも移住者が入るときに安くは入れるアパートもあるが、圧倒的に少ない。それを解決したのが圧倒的な数の村が管理している空家バンクである。また、本腰を入れて移住してくる人は、町が整備している宅地に家を建てる。また、日本発条株式会社の従業員は、30代でも年収600万円もらってる人も居るため、会社の近くに家を建てている。

これだけ好条件が揃っている。しかし、この好条件は宮田村だけではなく、当てはまる市町村はかなりの数がある。では何故（宮田村だけでは無いにしろ）宮田村は移住政策に成功したのだろうか。それは住む人にとって良い物・事は直ぐに実行してきたこと。その膨大な積み重ねであると感じた。全てが洗礼されていると感じた。何を、何処を取ってもいやな感じがしない。何よりも、まち・ひと・しごと総合戦略を作るときに、移住者を呼び込む為のかなりの数のフェアやセミナー・イベントを行い、積極的に移住者を引き寄せる専門のみらい創造課のマンパワーだという事を強く感じた。もし上ノ国に移住を引き寄せるならば、環境の良い住む所・初めて来る人に対する支援策や住みやすさの積極的なアピール・新規農業や漁業が心配なくできる環境・仕事の紹介・それが一手にできる人材全てが揃わなければ難しいかも知れないが、それが可能と私は信じている。



公園には長い滑り台と、ローラースケート練習場があり、スピードスケートの金メダリスト小平奈緒の夏期の練習場のになっていた。



宮田村の居住地



木曽駒ヶ岳の千畳敷カール



みらい創造課の保科さんと役場前



役場入り口直ぐのみらい創造課